千刈狸の呟き

～狸 養 成 所～

月影の狸

みなそれぞれ思い出深い養成所時代があっただろう。人里離れた所での全寮制だったので、どちらかというと「宝塚養成所」や「虎の穴」のようなストイックな日々であってもよさそうであるが、実際には放牧状態、その日暮らし、毎日国民文化祭的というものだった。

家訓というか設立理念というのが、沢山あったのは覚えているが、脳裡に焼き付いているのは、二つだけである。

一つ目は、「何にでも対応すること」。何でもできるようになるという事ではなくて、何であってもむきあう気持ちでいるということ。ひとまず話を聴いてみる、実際に現場に行ってみる、どうしようか考えてみる…あたりまえの事なのだが養成所では日々の出来事を通じて、それぞれ対応ができることを体感していく。おそらく幼い頃からの基盤の上に「何があっても自分は守られている」という絶対的な安心感を持つことで段々とそんな気持ちが培われていくのだと思う。裏山の烏がうるさくて眠れないとか、畑に粗大ゴミを捨てていかれて血圧が上がったとか、本来、市役所にいったら…と思うような患者さんを診ているなと気づいた方は、似たような養成所で養成されたのかもしれない。

二つ目は、「常に芸を磨くこと」。養成所に入ってすぐに合同キャンプがあり、いきなりその夜には芸大会。グループごとに趣向をこらした芸を披露する習わしとなっている。さらに寮のあちこちで夜な夜な各地の芸大会があり、まさに国民文化祭。県人会でも部活でもその調子であり、芸を追求し磨いていくことは、生活の一部になっていく。カラオケもケータイも何もない時代の芸であるので何でもよいわけで、本人だけ満足しているものもふくめればまさに百花繚乱だった。つい最近気が付いたのは、養成所一年目から今まで芸をやらない年はなかった。ただの芸好きだと思っていたが、一年のうちでも忘年会のシーズンともなると、虫が湧いてくるのがよく分かって、これは養成所時代に刷り込まれたものか何かに憑りつかれたのに違いない。長年やってくると芸風も変わってきたが昔のネタを基本にして十分また新鮮にやれるという醍醐味も味わえて楽しい。

この二つの家訓によって、余興ばかりやっているのだなと思っていただいても間違いではないが、このところ、二つの家訓の融合した形が一番性に合っていて無理なく生きていくコツだと分かった。例えば地域の老人クラブの会があるから「何か来てやってけれ」と頼まれると、ハイハイと二つ返事で出かけていって「筋トレの凄さ」とか５分くらい話しをして、あとは「一座」と称する流動的なメンバーと一緒かピンで芸を披露する事もある。また、健康クラブで「何か面白い事やってけれ」と頼まれると、やはり「身体を温める食生活」を５分くらい話して、会場でけん玉大会を始める。養成所で磨いた芸というか技もいくつかあるので、昭和の初期の方々が多い時は有効である。ただ、会場の方々のほうが詳しかったりうまかったりして、すべってしまうこともあり、その時は奥の手を使ってまとめあげて退散してくる。依頼の書面上は「健康講話」となってくるので依頼するほうもやるほうも形が整うし、広報する時も「けん玉大会」などと書かれるよりは、意外性を味方にし皆さんに事前に練習されるリスクを回避できる。ただし同じ場所で同じ芸はしないと決めている。養成所以来のポリシーであり、向上心を保つ秘訣でもあるし、地域でこうしていられる事への感謝の気持ちである。

「医療は芸術だ」という。一寸わかるかな…と思う齢になったので養成所での日々がなお一層愛おしい。

最後に、同じ養成所でも全然違う家訓で素晴らしい活躍をされている方々が大勢（ほとんど!?）である事を申し添えておきたい。